

柳菴雜筆

四

15
1489
4

門 45
號 1489
卷 4



柳菴雜筆卷之四 附錄

再生勝五郎

魯我五郎五度生色替里之事

黃金一寸乃月方

内夜青山兩家乃郎

浮田秀家書画

同家人八丈島へ傳へて各系

侍乃品

花押乃告内

署字 草名

早稲田大学図書館
34.11.6
書

柳菴雜筆卷之四

栗原信充 著

○武藏國多磨郡程窪村乃民半田郎子藤藏死後
文化十二年乙亥十月十日同郡柚木領中野村谷津
入と云ふ小佐原藏と云民乃子小生也一を勝又郎
と名付る養育一か勝又郎九歳と云又政六年小生
我ハ程窪の某子小里一を爰へ再生一を申を云一
小よ又程窪へ尋ね一違ふと無里一と當時世小
大里源藏又ハ村田吉方郎と云尾張乃國了仕一と
かや後子致仕と云源藏ハ苗字小谷田と云民乃子と
小里一此里依る思ふ曾我五郎時致乃伊豆國田中莊

乃五郎大丈致時と再生し兄十郎祐成と慈願の冥
苦を救ひ中伊豆山乃古籙了見の後常陸水戸
六地藏寺惠範と三生一武田大膳大丈晴信朝臣と
生一甲斐の勇士乃舊記了具ふ記せ長谷小池坊
專譽僧正と又生一六波羅密寺惠範と六生あく何
亡兄乃幽福を修せしと云々聖徳太子乃七生乃事
記さし中村上天皇乃所時天下を廻り法華經六
十六部を納たり頼朝房貞元二年八月七日信別水
内郡成管村静松寺に終りしが百七十年を経く久安
三年丁卯歳八月七日左馬頭義朝乃子了生也頼朝と
名乗せし熱田宮に法華經を法樂せんとせし俊綱

法師宇治關白頼通公乃子と生也俊綱と云一ハ十八
歳小一尾張守に任し法師大里一時にらか兄一熱
田大宮司を勘當一箱根乃大法師時政六十六部乃法
華經を書寫あく六十六箇國へ納たり一善根不依
北條時政と生也たりかと云と云先輩乃記載昭然大
之ハ概し偽と云難ふや清乃王士禎ハ明乃崇禎
七年甲戌子生也日本寛永十一年甲戌一永曆八年郷試中一八
年會試中一後官做二十餘年康熙辛未池北偶談廿
六卷を著し日本元禄士禎五十八歳乃時形其書中
子濟寧と云処乃邵士梅字暉暉順治辛卯乃舉人已亥
に進士了登れ里順治己亥ハ日本の前生ハ栖霞乃人
萬治二年ハある

みく高東海と云者ありし時を自記に居ると云其妻
某氏死時云やうと世乃同是婦たう居し今死しと館
陶董氏子生ふ董氏乃家ハ濱河何曲乃弟之家形り君
蕭寺小寓し佛經を繕し後子我を訪へしと遺云し
て終る後十餘年邵士梅栖霞と云処の教諭と云役子
あり東海と云し時乃家小至しハそや孫の世あり
志と云其後館陶と云処へ移し蕭寺小寓しける小藏
經乃有る處ハ寂寥子取閱し忽亡妻の言し詞を思ふ
世終る濱河何曲乃弟之家了董氏ありと尋る
果し女ありけし是を娶しける十餘年あり
妻董氏病く死む時又云けるハ後襄陽王氏子生

る王氏門前子二柳樹ありしと云しと今二子を生
へし形りと云し終る後果し襄陽王氏を娶し
かや邵士梅康熙十八年己未京師小ありし士禎友
子語里しと云しハ再生し妻と云生ふ夫婦たる
奇と云へし士禎虚誕云人子ありハ又同書小章格菴
正宸一念乃誤し依し輪廻小隨始ハ縁小あり終
粵小あり順寧小在し七歳と云言ハ門生曹不霞過
るを迎し是を呼来歴を告し王を載たり強色ハ勝
郎事小疑人へし小あら
○黄金を純精小鎔鑄ハ曲尺一寸四方六面小重百六
十名あり依し是を以て乃金と云言ハ方一寸厚一分

あり、同く十六ある故ありと我々是金の極品ありと
云々但享保十二年十一月金座へ仰付らば黄金一寸
四方六面乃重さを試せし時ハ百二十あるありと
物觀乃衡考み見えし然る時ハ今百六十あると
云々定論とかく難し七金譯説附録ハ金と水と其重
乃差ハ一と十九と乃如くあるは則黄金ハ水より重
と十九倍なりと云々律原發揮ハ京升ハ合六勺六撮
半弱乃水重二百廿八ある許と見ゆハ合六勺六撮半弱
ハ積三十寸一分微弱あり是を二百廿八ある許あり歸
せしハ積一寸十分ハ水重七ある五分七釐ハ毫七絲又
と以是を十九倍せしハ百四十三ある九分二釐餘なり

即是西洋乃法ハ一と百六十あると百二十あるとの中
或ハ水も亦輕重一差世ハ京升ハ百八十八ある水
あり五百あるハ水あり二百あるハ水あり西洋乃法ハ
確論と云難し後漢禮儀志ハ水輕重を推る一升冬
重十二兩と云梁乃沈約ハ枕中記ハ漏水一升秤重一
斤時一刻を經ても云々後漢乃一升ハ京升の一合一
勺許ハ當世ハ重九又十二ある八分餘あるへ一是を十
二兩と為ともハ一兩今乃四ある一分三釐八毫四絲
一斤ハ今乃六十六ある二分餘ハ比は又別ハ方七分六
釐弱六面の金の重を較る六十二ある一分七釐餘ハ
准を即九府圖法ハ黄金方寸ありと重一斤と云と大

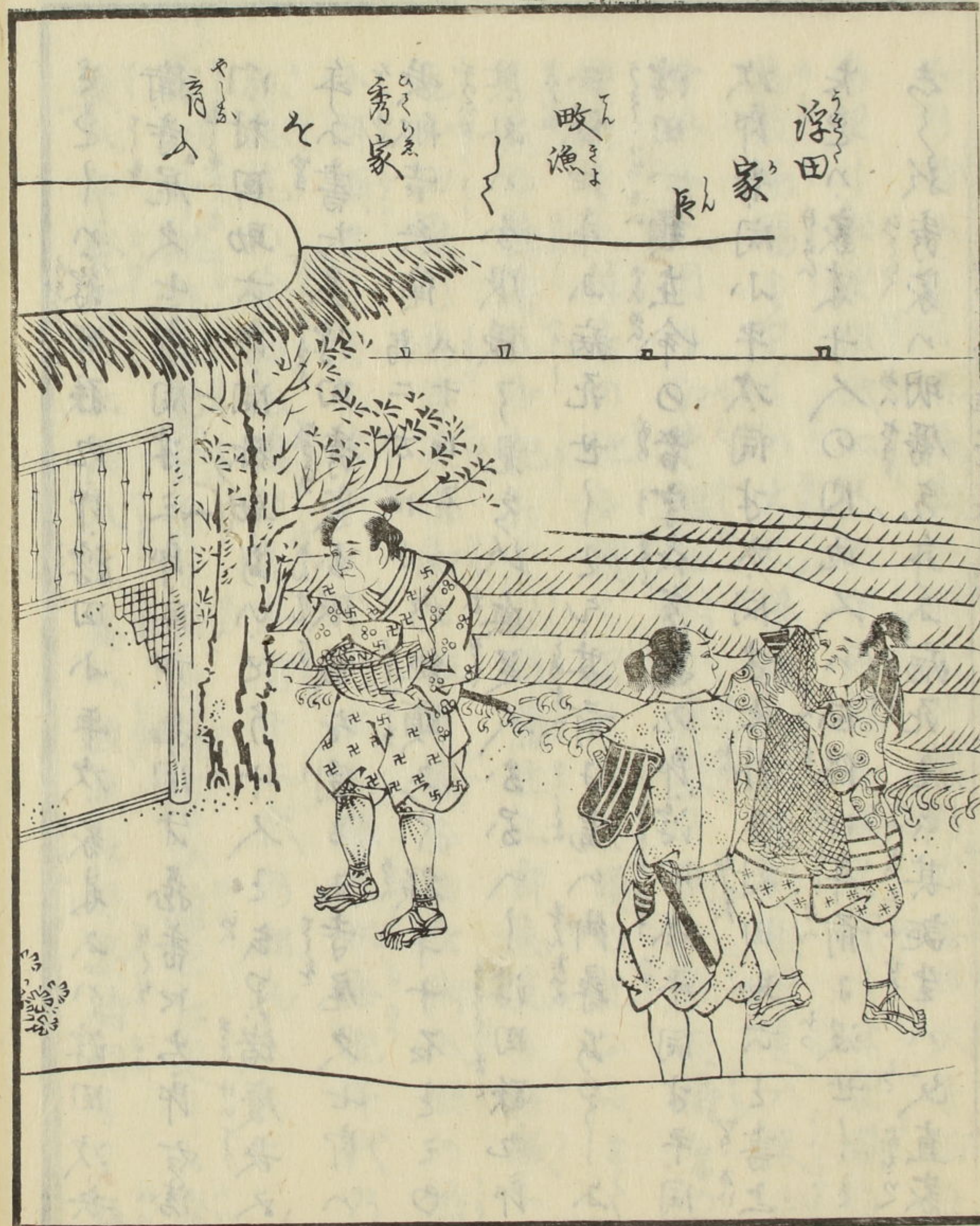
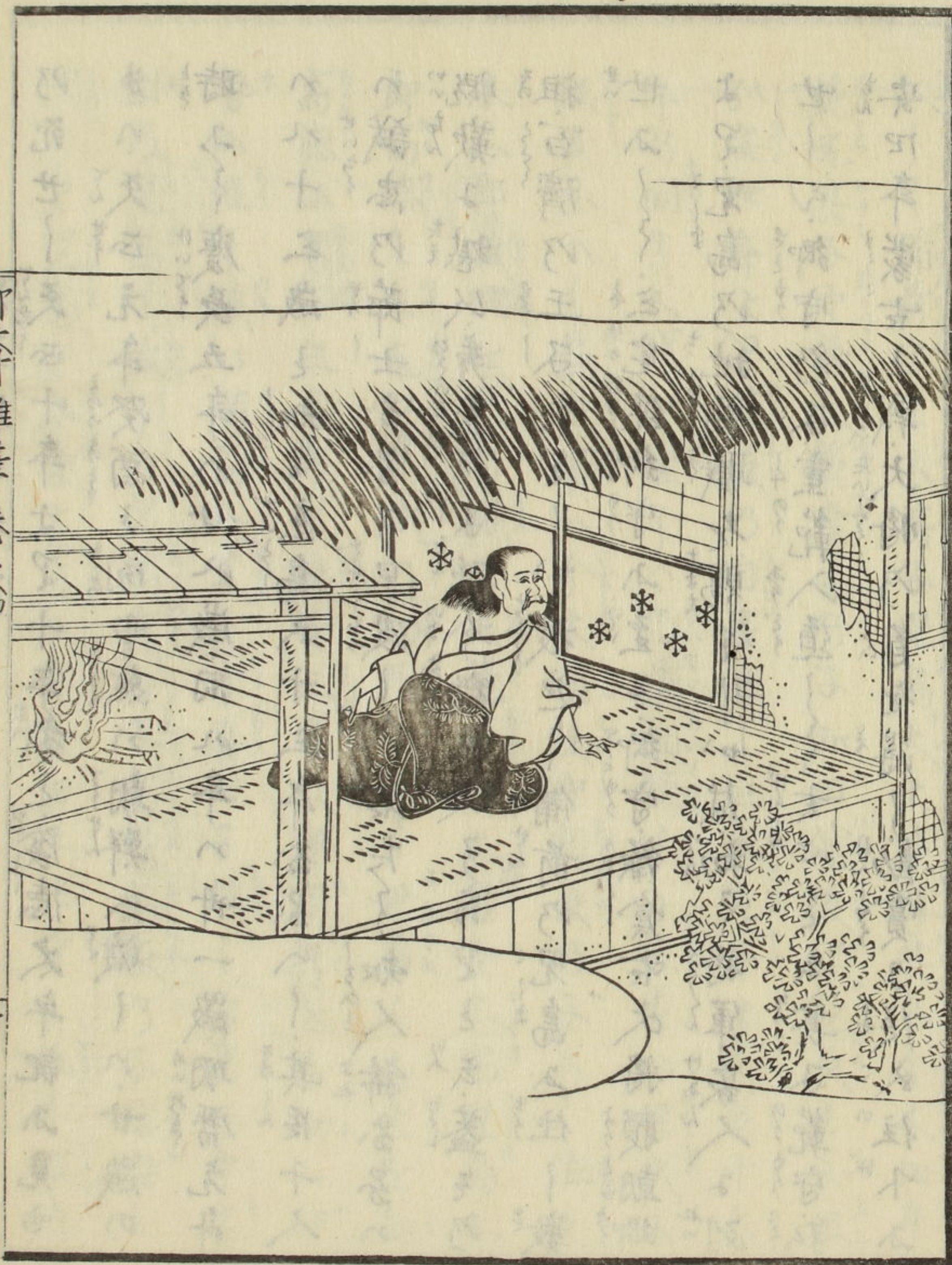
御覽 雜 卷之四
四

不近一然也ハ是又大概乃称量と知ヘー
 甲列乃金工某ヲ説ハ山吹金に十八分あり上ハ
 鑄ニ十に五を得る依ニ是を以て乃金と云極品
 と云里深井庄兵衛ハ通常甫甲列ノ金座ノ説ハ無定限六十
 同號ハ乃金七分六釐ハ乃金燒ハ乃金八分と云是
 乃何日燒キハ耗比と云里恒常甫ハ銀を鎔化シ金と
 為ト云説ハ小判六十同ト云説乃本據ハ一々實ハ銀
 を鎔シ金と為ハハあり以ト殿村常久ハ語リ
 貞享元年磯村吉徳著ハ世一算法問疑抄ハ金一寸ハ
 方六面重百四十六分と云也又同書頭書ハ金一寸

ハ方六面重百七十八分と百六十六分に分と百六十
 分と三種を載シ本書乃説トハ種別ヲ述テ今校定
 主ハ處ト合セテ七種の中百六十六分と云者古今比同
 乃説ハ乃同書ハ永一尺ハ方六面重七貫に百月と云
 里然ル時ハ方一寸ハ方六面の水重七分に分ハ是
 分十九を衆モ述ハ百に十五六分と云乃律原發揮の
 説より云々ト餘輕
 田谷内藤新宿乃内儀家の邸ト青山乃青山家の邸ト
 ハ天正十八年九月十八日ハ賜書ト云云内儀修理
 亮清成青山常陸介忠成二人志々關東乃奉引職を勤
 以新時形ノ清成相列當麻ハ子石忠成相列中郡ハ子

不乃時ふく居居爰ハ清成作搦乃内忠成大手内子
 ありし時里但氏二人乃下屋鋪を賜ふりよ里前子
 屋敷地賜ふりハ大久保後又郎忠新里是ハ矢正
 十八年三月子江戸福田村へ参入し御入國を待まり
 せりし、後居の地子賜ふりし其頃の記ふりし
 其家の簿書ふり記たし又後藤生三郎忠光り屋敷ハ
 元小田原乃島津長徳軒り住し家あるを御入國の時
 小拜領せしと云忠行ハ今乃大久保主水忠記十代乃
 祖忠光ハ今後後継教元忠智十二代乃祖云
 ○浮田中納言秀家園原ハ敗也薩摩ハ遁也たしり慶
 長八年癸卯の二月八丈島へ放也たし其時同く流

さむハ浮田孫九郎浮田小平次家来ハ浮田次兵
 衛寺尾久七郎同才三郎同市兵衛同才兵衛香江太郎右衛
 門村田助六郎同孫助あいさう十人ト云里諸慶長ハ
 年ハ書たハ浮田秀家ハ限帳を宛るハ寺尾久七郎ハ
 長船告兵衛高二万石ハ乃紐頭ハ緑千石ト云也
 其外ハ分限帳り見えハ無是人ハ不ハ浮田孫九郎
 正保四年ハ病死せしと云其前子島ハ御尋ありハ
 浮田一類在命の者宇佐多孫九郎浮田忠平同才平同
 次郎吉同小平次同才六同才七外ハ村田助六ト書上
 た也ハ家来十人の内九人ハ正保四年前子没せしと
 云り秀家ハ明暦元年ハ病死ト云其誕生ハ父直家



乃死せし天正十年より十年系と陰徳太平記に見ゆ
也。天正元年癸酉と聞ゆ。然ハ朝鮮へ渡しハ廿歳の
時より慶長五年ハ廿八歳同八年ハ卅一歳明暦元年
ハ八十三歳と知る在島又十三年おゑへ其長十人
ハ誠忠乃節士おゑる早没し名たし知人稀おゑハ
慨歎し堪以秀家乃子孫今猶ハ父よりあまんと云蓋そ乃
祖百濟乃王子たしハ放逸し備前乃児島お住し數
世おゑし宅連郷守おゑる郷守鎌倉右大将頼朝卿
より児島乃地頭職を賜ひハ初し將軍家人より列
せし郷守乃子重範入道しハ玄心と云其子範守弘
安元年蒙古と戦大将乃首を得し勸賞より後ハ位下お

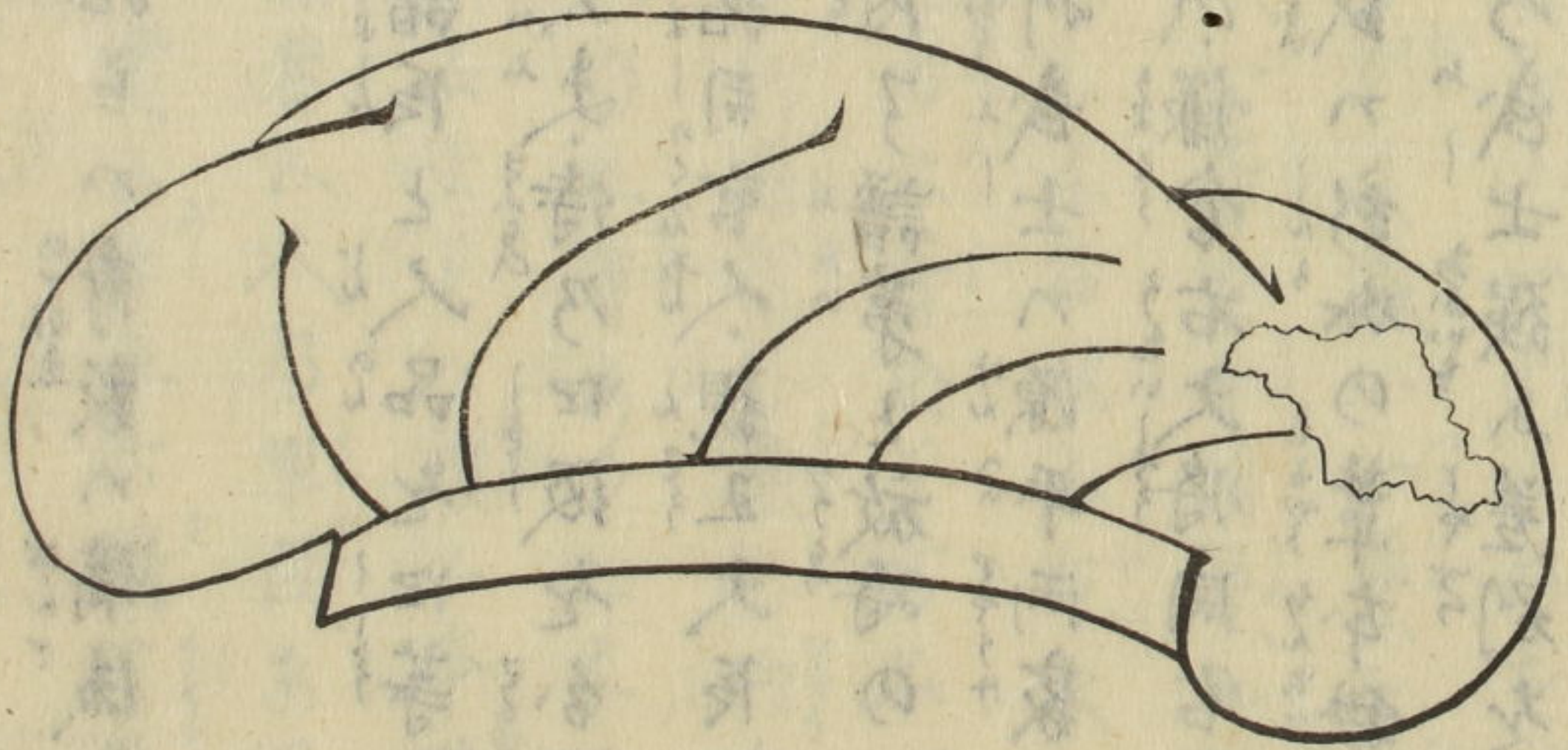
叙し備前守と云其子児島大史範勝其子今本に系
範光其子中務丞範常乃子和田備後守範長と云但
弘安元年より範長乃自害せし延元元年より五十六
年乃間より又代を經しハ兄弟相授し然ハ歴代ハ
誤おゑへ範長實ハ今本備後守高長乃子より佐々
木三郎盛綱七代乃孫と云範長乃三男を宅児島と
即高德と云元弘建武乃切辰より世番よりあまを和
高德乃男子三人あり長を宅太郎高秀と云初ハ伊
勢おゑし後ハ備前おゑる宇喜田より住しハ宇喜
田乃児島と稱しハ高秀乃子高家高家乃子信徳より
代より児島と名乗る直し宇喜田土佐守と稱し信徳

浮田秀乃家書画

八丈島崇福寺藏

孫月一々々々人
古あるまじき室かゝる女
知れん

秀乃家



乃子左馬允久家乃子和泉守能家也乃子興家乃
子直家也乃子秀家也乃子然らハ秀家ハ備後三郎ヨリ
九代ハ當レリ

○職原鈔ハ親王公卿諸王諸臣と人品を以て等分ち又
諸臣乃中ハ一人公卿諸大夫侍乃以級を分て侍の
内ハ五位六位乃下北面諸司官人親王大臣以下諸家
恪勤三等あり又三等乃内ハ譜第と放將の二品あり
ハ侍乃品六級と云へ折武士ハ源平兩家ハ属せ
不ぬ皆子孫譜第と称し鎌倉右大將同右大臣將相
ハ昇の後諸大夫乃後亂或ハ新加の輩本秩を立て自
昇進し列せと云共重代乃武士強ハ差別を存せ以兩

家元諸大夫也其時已ハ肩をハ一列乃好を成故乃此
外本所乃侍品或ハ諸道子列ハ或ハ一藝を傳ハ草
とあるハ侍と武士とハ又一等を分ハ是五百餘年前
乃品級形也今ハ万石以上ハ子石以上布衣以上御目
見以上御譜代席以上御抱者六等形也万石以上不國
主城主所主乃三級を分ち御譜代外様乃兩途あり大
廣間持間帝鑑間雁間菊間乃五席あり三子石以上の
寄合席と称せと云共五千石ヨリハ旗二本騎士ハ人
弓者ハ人鐵砲者ハ人長槍者ハ人乃軍役あり是ハ甲
斐乃武田乃家也知乃千貫ハ士五六騎ヲ鉄者各ハ
人預同心六十騎を一備と云子原ヨリ也一ハ分ハ一

花乃御所乃内々々細々大追物射せせしと伊勢
宗久乃史冊子小見々々然也共花御所乃占地一万
八百坪小過以其内々々寝敷泉敷對乃屋敷と棟敷立ら
せ々猶大射入入地々々空地あり蓋元後之營造也く必
用専途乃第宅乃々形也は形かへく供出武家御所
子門舞臺鞠懸廣間納戸構廊と立けけく水廻り
々々形也古々武家乃館の固々々傳々々以惜へきと
形也

○寛永十二年刻本節用集小新形吉凶を論る木姓ハ元
數ハ川三川吉四九又十凶 大姓ハ元數二川又川七
川十ハ吉一川六凶 土姓ハ元數又川十ハ吉三凶

金性ハ元數二川九川吉 水性ハ元數一川六川吉と
見也蓋又行生數成數子依々々々知る也共當時世
小用入る人ハ元里一ハ水戸乃中納言光圀卿ハ寛
永又年戌辰子誕生す後ハ木性かゝり御花押ハ四
元ハ里二ハ凶と云を用ひ玉ふハ尾張の中納言綱誠
卿ハ承應元年壬辰子誕生す後ハ水性かゝり御花押
ハ四元ハ里一ハ高松少將頼重朝臣ハ壬戌水性かゝり花押
ハ四元ハ里一ハ同少將頼常朝臣ハ壬辰水性かゝり
字ハ元形ハ世々用入る説からんハ件乃方々態と
凶と云數を用ひ玉ふハ福島左衛門大史凶則ハ辛
酉木性ハ元里一ハ押字三元吉と云ハ協人ハ中家ハ減ハ蒲

水戸中納言光圀卿

水姓元四凶

同一凶



光圀



高松少将

水姓元四凶

頼重



水姓元四凶



福島参議

水姓元二



蒲生参議

金姓元四音



花押藪
續花押藪
等ふ出る
を箱
宝以

尾張中納言綱誠卿

水姓元四凶



生忠卿發外金性ふく押字元凶吉といふと身早世
志く子孫断絶せし秘らに押字乃吉凶に論る是次去
共判兵庫とく判乃吉凶を論る武田家了仕る老
あまの寛永比に起るふはあはく但押字と云ふ公
武令了受勅人中務者子宣送里中務覆奏し既里式
依る署を取とあふ署子起る里東大寺寶藏乃大和火
税帳の奥ふ

以前收納火税穀類并神戸組等數具録如前謹解

天平二年十二月廿日從七位上依目勅土等處酒人宿稱吉磨

從五位下大宅朝臣大國

正六位上藤原實衡主等城上直直

臣等下及等許清朝臣津嶋

正七位上行藤原都濃朝臣光并

と見えたるふり考へし年号月日位官姓ハ書乎
書せ名もろ里冬自身記を署と云形里通典ハ歐
陽修云俗草書を以て名かくを押字と云あり草
書ハ署せハ押字ハ真行書ハ書せハ署字
なりと知へし雲谷雜記ハ按ハ東觀餘論ハ唐文皇群
臣上奏せしむる真草用ハ不任以惟名草を得以遂
草名を以て花押と為章陟ハ五采雲曼也と云ふ
草名ハ上奏を以て得以署字ハ下ハ用ハふハ非
を知へし唐ハ朱巨川ハ造身署字

前用
依
省

金紫光祿大夫吏部尚書 遵慶
銀青光祿大夫行吏部侍郎 延昌

朝議大夫守吏部侍郎 綰
尚書左丞上柱國 渙
告試大理評事兼 豪州
鍾離縣令朱巨川奉
勅如右符到奉行

亞
主事 仙
令史 袁琳

大曆三年八月 早

斯ハ如ハ大曆三年ハ唐ハ代宗ハ即位ハ六年ハ日本
桓德天皇神護景雲二年ハ唐ハ天寶二年ハ日本

世
高八寸
三

年後形の二通を以て東西と云ふ署字乃體同一
出を和屋一草涉五采雲と云ハ酉陽雜題に草
兄草涉毎侍碑を以て尺牘を主らしむ往來乃復章
未嘗自れせ以涉唯名を署せ教乃之嘗自謂書生
所乃涉乃字又采雲乃如しと當時乃之多く倣效あり
を部云又雲體と云里とわう草涉ハ草安石乃子
草増乃孫唐乃京兆萬年縣乃人文詞を善し書ハ階
法あり弟職と共乃父乃表乃門を杜るおき教を八年
後九齡引く中書舍人とあしけふ累乃之吏部尚書
遷ると云ハ陶元天寶年間乃人なり日本乃天平年
中ハあふ孫ふと云ハ草名ハ署字ハ唐代より所見有

と云ハ一説云ハ秦先典を焚燒し乃古文を廢し更
ハ體を用ふ一ハ大篆二ハ小篆三ハ刻符四ハ摹印
ハ小篆書六ハ署書門題ハ用ハ七ハ尺書八ハ隸書と
あふ署書ハ即皇朝ハ傳ハたハ額字あり額字乃體ハ
簡冊ハ用ハふハ大篆と別ハ刻符摹印とハ同一から
ぬやうハ蕭何ハ先筆を以て朱夾殿ハ題ハ草仲將ハ
張芝ハ筆左伯ハ紙ハ仲將乃墨と手とを以て洛陽鄭
許三都乃宮觀ハ題署せしと三輔決錄ハ見えり教ハ
就ハ考ハふハ群臣上奏乃題署ハ以署書乃體ハ後ハ
各々名字を作し置し證とせし故ハ署ハ教ハあハ
我朝ハもハ是ハ因循せしと云ハたハ又皇朝乃

小野道風像

佐理行成二卿の

像にあまとい

まゝ

由あれハ

あゝ

おさぐ



信元
手縮

巾子のよより
襪の底まゝ

六寸二分

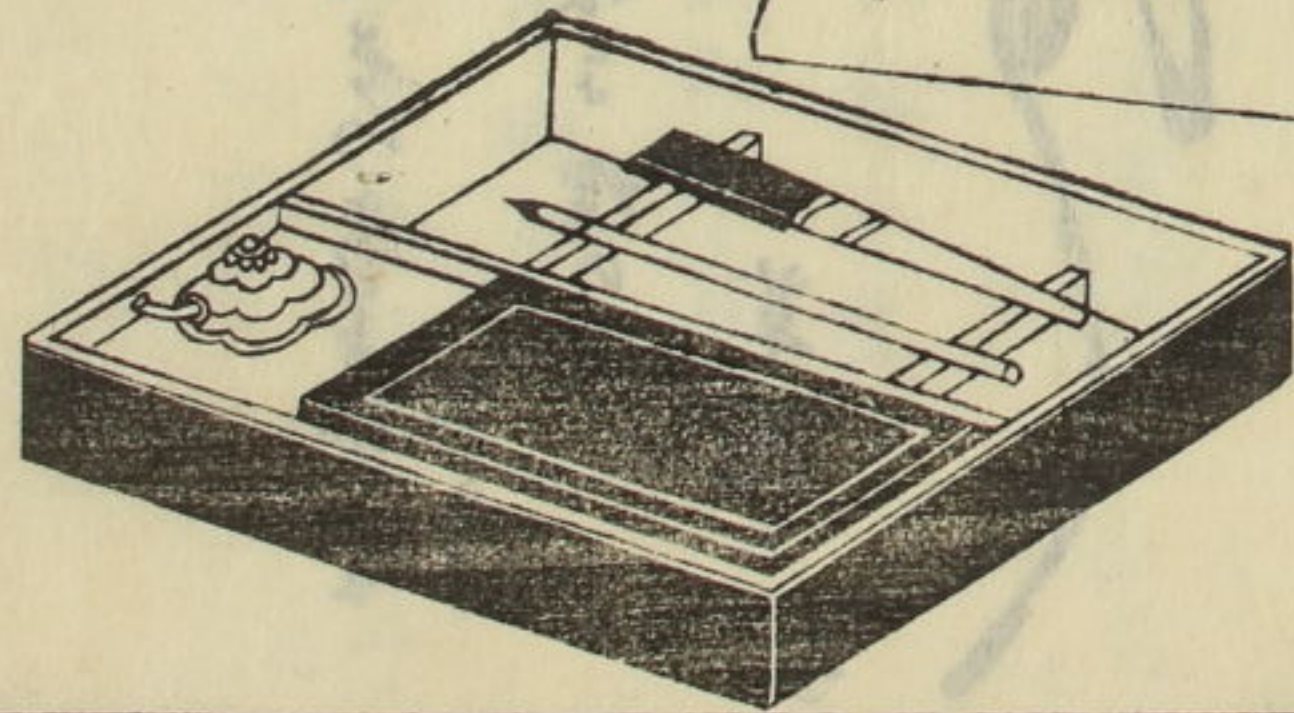
高麗縁乃

帖あり

紙中襪

故

畧



と云

参議佐理卿草名

药

とある

春

理謹言

理今月十六日東到也の事と云

又按子理の字の

草體と云

正暦三年大宰大貳

あゝ正三位一鎮西へ下向

を教と云、又月十九日長列

赤間泊より、春宮持大史の許へ

贈る消息を、佐理卿草名に云あり

春宮持大史へ相當後位下から云云位

とハ五階の相違あり、故に草名を用ひあふなりあれあり

とへハ器字の件を用ひ下へハ押字を用ひる事と明白あり

子理

旅士理

松王

小野道風朝臣押字

續花押藪

不見也

齊

衛字

生色一人なり

推大納言行成卿押字

花押藪

不出

成

行成乃字體分明なり

行成卿ハ天保元年ハ生る
道風朝臣卒後又年ありなり
佐理卿二十七の時あり
佐理卿薨後三十年万壽三年
二月八日ハ薨又十七

以上を云跡と云

武家よりハ鎌倉右大臣頼朝卿乃消息

二月

右大臣

消息
ハ周
おけれ
累ハ

新田河内守

右大臣

新字
将居
一ハ
二分

かく遊々せし大草名ハ頼字乃扁と朝字乃旁とを
合を大と見也鶴岡ハあふ頼朝卿乃草名金剛峯寺
杵築社等ハ傳々カハ乃を見考人へ

頼朝卿草名花押藪

鶴岡

一寸六分許

黒ハ東

白ハ西

出雲 杵築社

二寸餘

高野山

一寸八分許

同

寺 金剛峯

出雲 杵築社

二合ある上ハ

月白

京都將軍家ハ草名乃上ハ又御名字を題せり
カハ是ハ他ハ混カハキリ非也ハ形ハ管領ハ又姓名
を記せし形ハ管領乃名を記せば細川勝元朝臣ヨリ
起ルハ花押藪ハ義將ト名を記し草名但法師ハ姓
カハ官カハ姓ハ名乃下ハ押字を記し證カハ上

日蓮上人。大乗坊玄證。蘭溪道隆。竺仙梵僊。と名と押字と併せ記せり

玄證。蘭梨押字

玄證

覺鑊上人。乃附法大乗。阿闍梨。玄證。乃傳來せし十八道梵本。乃奥書なり。乃如。押字ハ判字あり。

蘭溪道隆押字

竺仙梵僊押字

道隆

梵僊

かくの如く。但出家からしむ官位あり。人の姓。草名のみ。あし證と為。魚きふあし。孫は。姓名を記し。押字を歟。

せし如く。鹿島乃寶庫乃文書をくく。知へし。

元亨三年二月十日讓狀

百濟家成

田畠合せし。又段を惣領。美臣。成幹へ。ゆり。狀。子。見。也。家成字を。六郎次郎と云。

文永三年十二月御下知

相模守幸朝

左京權左衛門

相模守ハ時宗朝臣
左京權大進ハ政村朝臣
惟康將軍乃執權あり
ハ二通
ニハ縮寫あり

然る。亨德乃亂。より。京鎌倉。和。せ。以。應仁。乃難。子。至。里。英雄。一隅。朝據。地。を。争。以。塙。を。侵。勇士。を。招。く。み。

重勝を惜み以死士を養ふ事厚録を以て是に於て
感状證文乃體一變志を將帥乃名と押字とを并せ題
志を以て勳功を證せしむる事

元弘三年新田義貞卿證狀

鹿島
文書

常陸國御家人

小四郎久轉

又四郎轉國

月字
路字
七寸

月十九日馳参方里路

御家人の行

藤房々住所参方方由

六月廿四日行

石著到同廿四日鎌倉へ

一尺

弘三年六月十四日

永

式久轉轉國乃著到破
裂去る全から以て云
と元弘年間乃書式
を觀る是里余既子
別る石を勒を依る爰
子編寫を永に判へ即
義貞卿乃自筆云

長祿三年細川勝元證狀

去月十八日於上列佐貫氏相承系
合戦の時被依るる新田義貞大輔
後を其末衣被妙路に被軍
印を其所被下之仍被其件

長祿三年十二月廿五日 吉原義貞

新田義貞大輔

是等を以て名と押字を記し理を知へし是後今川武
因比條等乃證狀ハ人々乃家小多く傳へた也ハ珍
志け被し寛永正保乃頃ハ身不煩あつて自筆子押字
ハ此等被時ハ印判を用ひらるる如し

保科肥後守正之朝臣状

消息乃
上書

文章ハ開かぬ也ハ
墨と

保科肥後守正之朝臣状

鍋島甲斐守直澄状

保科肥後守正之朝臣状

保科肥後守正之朝臣状



印の色常の墨と
ミ



印の色
うと墨
如う

正之朝臣ハ慶長十六
年ハ生也直澄ハ元和
六年ハ生也一人如う

當時乃歷々押字を以て自筆せしと云ふ二通あり明白
かゝる個本を以て押字を厭ふ墨あり捺たかゝる古行乃
御所高基朝臣乃状に見入たる也ハ文明の末天文の前
子起也るなり

柳菴雜筆卷之四終

柳菴雜筆卷之四

嘉永紀元季夏
書林知新堂版

京都書林
大坂書林

東都書林

三條通外屋町	出雲寺文次郎
心齋橋通北久太郎町	河内屋喜兵衛
日本橋通一町目	須原屋茂兵衛
日本橋通二町目	山城屋佐兵衛
日本橋通二町目	小林新兵衛
芝神明前	岡田屋嘉七
本石町十軒店	英大助
横山町三町目	和泉屋金右衛門
淺草茅町二丁目	須原屋伊八
下谷池之端仲町	岡村庄助
下谷御成道	英文藏
神田旅籠町一丁目	紙屋徳八

